

# 大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）  
〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第 63 号

大阪市史料調査会（編集）  
大阪市立中央図書館内 TEL06-6539-3333

## ● 『新修大阪市史 史料編』 戦時編を刊行しました！

昭和 12 年（1937）の日中戦争開戦により突入した「戦争の時代」は、昭和 20 年（1945）の敗戦で終わりを迎えます。大阪市史編纂所では、戦時期の大阪市域にかかる歴史資料を未来につむぐべく、『新修大阪市史 史料編』第 21 巻「近代Ⅷ 戦時編」を刊行しました。

本書では、テーマを①政治・行政、②経済、③社会・市民生活、④文化・教育、⑤大空襲の五つに分類したうえで、関連史料をそれぞれ時系列に配列しています。これまで紹介されていない史料を優先しながら選定し、総数 180 点弱にのぼる史料を掲載することができました。

収録史料のうち、公文書としては「大阪市行政文書」や坂間棟治市長の演説集『歴代市長言文集 坂間篇』のほか、大阪府・府知事により作成された文書などがあります。

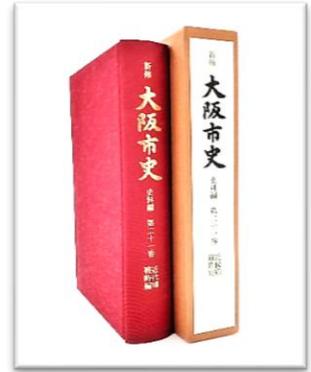
他方、学校関係では西今里、清堀、浪速津などの国民学校、宗教関係では香具波志神社、野田恵美須神社、民間企業関係では朝日新聞社、生駒時計店、白山殖産会社、橘屋、虎屋信託銀行、樋屋製薬会社などの史料を使用しています。また、大阪の文化史上著名な南木芳太郎などの個人コレクションのほか、市井の「名もなき」人びとによる記録もできるだけ採録することにつとめました。

こうした日本側の記録類に加え、GHQ/SCAP 文書や米軍資料からも多数の史料を収めました。これら外国側の史料は本書をさらに有意義なものにしてくれています。

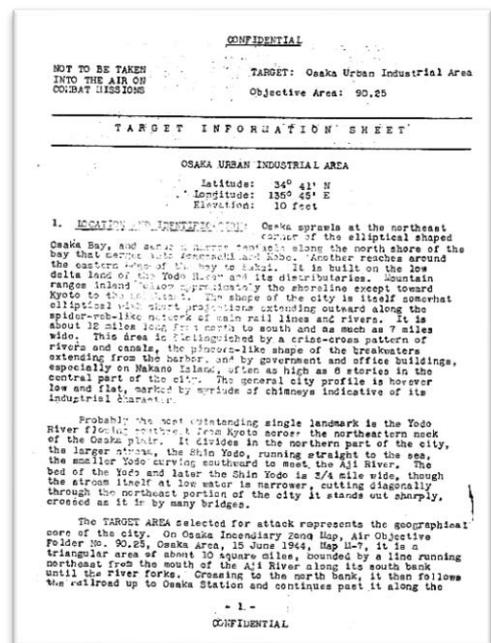
もっとも、「日本語」で書かれているとはいえ、当時の史料を解説するのはそれほど容易ではありません。また、大阪大空襲にかかる米軍資料のなかには、英文しか掲載することができなかったものもあります。

そこで、大阪市立中央図書館と大阪市史料調査会で「史料でたどる「おおさか」講演会」を催し、本書の内容をダイジェストで解説することにしました。題して「戦時下の大阪を読み解く—統制、疎開、空襲—」（9月21日（土）14時～15時30分、大阪市立中央図書館 5階 大会議室、詳細は講演会チラシのほか、市立中央図書館HPや『いちよう並木』8月号をご参照ください）。

一例を挙げると、米軍が爆撃する準備段階でその攻撃目標に関する情報を整理した文書である *Target Information Sheet* 「攻撃目標情報票」。これは、緯度・経度・標高、攻撃目標エリアの位置・特徴・重要性、具体的な攻撃目標物が端的にまとめられており、実際に爆撃するにあたって米軍が



『新修大阪市史 史料編』  
戦時編



Target Information Sheet,  
Osaka Urban Industrial Area,  
1945/3/10（部分、米国国立公文書館蔵）

大阪という地域をどのように分析していたのかがよく示されている、とても興味深い史料です。しかしながら、本書では日本語の訳文を掲げることができませんでしたので、講演会で詳細に紹介する予定です。

このように、講演会では本書に収録した史料のなかからとくにオススメの史料をわかりやすく読み解いていきます。ぜひともこの機会にご参加いただき、戦時下大阪のリアルを体験していただければ幸いです。

(平良 聡弘)

## ●大阪市民と兵士の宿泊—陸軍大演習からみる—

第一次世界大戦中の大正3年（1914）、11月15～18日にかけて大阪で陸軍特別大演習が行われました。この演習は天皇による統監の下、二軍に分かれて毎年一回行われ、場所は毎年変更されました。特別大演習には二個師団以上が参加するもので、この演習時も四個師団（第四、十、十一、十七）などが参加し、大阪市域の占領を狙う軍と防衛を担う軍に分かれ、郊外で模擬戦を行いました。

大演習の後、多くの参加部隊が各駐屯地<sup>ちゆうとんち</sup>に帰るまでの数日間、北区・西区・現中央区（旧東区・旧南区）に分散して宿泊しました。大阪市の作成した記録には、市内に宿泊した兵士数は合計約二万六千名とあります（『大正三年陸軍特別大演習大阪市記録』）。ここでは旧南区<sup>うちあんどうじまち</sup>内安堂寺町で借家業を営む、町の有力者であった井上平兵衛<sup>いのうえへいべ</sup>という人物の日記を活用し、兵士受入体制の整備過程を見ていきます。

大阪市は兵隊の宿泊について、5月に簡単な調査を行っていましたが、10月に前述の市内四区の詳細な再調査に着手し、官吏による戸別調査も始めました。井上家にも10月12日に、南区役所の官吏が部屋数の調査に来ています。27日には井上が区役所を訪れて担当者と協議し、近く自宅の図を送ると伝えています。井上たちはその後も、宿泊に関して相談・協議し、演習前日の11月14日に宿舍の割当を行い、区役所に報告しています。16日にも役所から「宿舍心得書」が届くなど、受入直前まで準備は続きました。

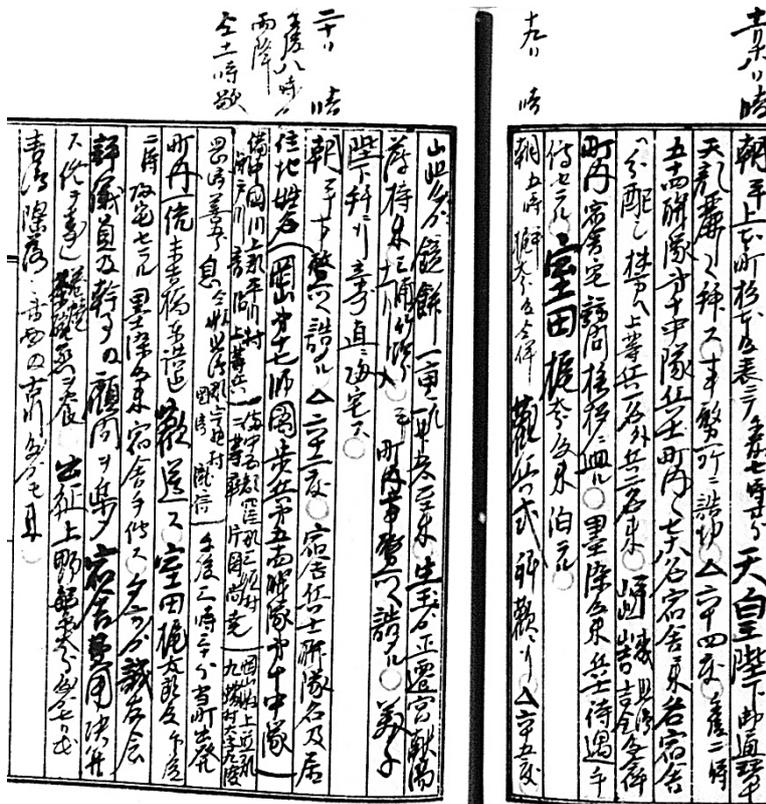
内安堂寺町には、第十七師団歩兵第五十四連隊が宿泊しました。18日の演習終了後、町には78名の兵士が到着し、井上宅にも3名宿泊しました。この日、井上を含む町の有力者たちは、兵士の宿舍となった

家への挨拶も行っています。20日には兵士の帰営に際し、「町内一統」<sup>すえよし</sup>が末吉橋<sup>ぼし</sup>まで見送りに出ています。井上のもとには、22日に宿泊した兵士から、26日には区長からも礼状が届きました。

このように内安堂寺町では、役所が町内の有力者と協力して宿泊の割当を決め、市民側からも意見を出していました。宿泊した兵士たちの詳細な様子は分かりませんが、少なくとも井上の日記からは、大きな問題は窺えません。

大阪市も市内の各宿主は「誠意」をもって歓待し、兵士も「謙譲」で「粗暴倨傲」<sup>きようごう</sup>といった態度は見られなかったと総括しました。短期間とはいえ、二万超の兵士を市内各所に受け入れるという難事でしたが、市民の尽力もあり大きな混乱は無かったようです。

(桑田 翔)



井上平兵衛日記（戸田知子氏蔵）

## ●天王寺名物「蛸たこ」

明治から昭和の初め、春秋の彼岸詣でで賑わう四天王寺の境内は、たくさんの見世物小屋が立ち並んでいたそうです。曲芸や猿芝居、果ては奇怪なるくろっ首まで、ありとあらゆる物で溢れるなか、ひととき人気だったのが、通称「蛸たこ」と言われた大道芸の一座でした。

「とうさん、ぼんさん（お嬢ちゃん、おぼっちゃん）、眼鏡をお目々にしっかりつけて、ハイヨウ蛸ぢゃいな蛸ぢゃいな」。ひょうきんな呼び声で子供たちを集めると、1回3銭で取っ手の付いたのぞき眼鏡を渡します。人垣の中央には、大きな蛸のかぶりものを付けた男性。「タコ、タァコ」と囃しながら、滑稽な身振りで踊ります。お次は下半身に馬の張ボテを付けた「大将」が登場、お手製の刀でチャンバラしながら「ヤァヤァ」と蛸を追いかけて回す、といった調子。

なんともばかげたこの見世物、人気の秘密は、眼鏡にありました。レンズが多角形にカットされていて、のぞくと、中ではたくさんのタコや馬が走り回っている、という訳なのです。正式には「ホニホロ」といわれたオランダ由来のこの眼鏡、明治15年（1882）、大阪ではじめて見世物に使ったのは、この「蛸たこ」の一座でした。以来半世紀以上、廃れることなく皆に愛され、出し物は変われど、蛸は一番のスターであり続けたのでした。

「蛸たこ」は、大阪を代表する文化人たちをも魅了しました。島之内で菓屋を営む旧家に生まれた洋画家・小出権重（1887-1931）は、その思い出を語っています。「この眼鏡を借りて、蛸退治を覗く時は即ち光は分解して虹となり、無数の蛸は無数の大将に追廻されるのである。蛸と大将と色彩の大洪水である。未来派と活動写真が合同した訳だから面白くて堪まらないのだ。私はこの近代的な興行に共鳴してなかなか動かず父を手古摺らせた（略）」（随筆集『めでたき風景』、昭和5年）。幼い心に鮮烈な印象を残した大阪の彼岸の一風景は、生田花朝（1889-1978）や菅楯彦（1878-1963）、長谷川貞信（2代、1848-1940）といった画家たちによっても残されることとなりました。



2代長谷川貞信画「彼岸會蛸たこの図」

（『上方』第75号表紙、昭和12年）



小出権重画「春の彼岸とたこめがね」挿絵

（『めでたき風景』より）

熱心な玩具コレクターだった大阪財界の重鎮・岸本彩星（本名五兵衛、1898-1946）もそのひとりです。彼はかねがね「五十有余年の長年月、主として小供相手の郷土色を帯びたる芸術・蛸々の玩具が一つも大阪にない」のを嘆き、ついには彼の心に生きる「蛸々踊り人形」を作ってもらったのでした。昭和12年（1937）、人形の完成を祝ったお披露目会では、座長による本家蛸たこ踊りも披露され、岸本手ずから編集した冊子（子寿里庫叢書『天王寺の蛸〜眼鏡』）が配られました。子どもたちの心をつかんだ天王寺の「蛸たこ」は、明治から昭和へと時を経て、立派な大阪名物となりました。そして、幼い日々を懐かしむかつての子どもたちにより、ついには郷土芸能ともなったのです。

（白杉 一葉）

# 編集所からのお知らせ

## ○刊行物

『大阪の歴史』（本体価格 700 円 送料実費）

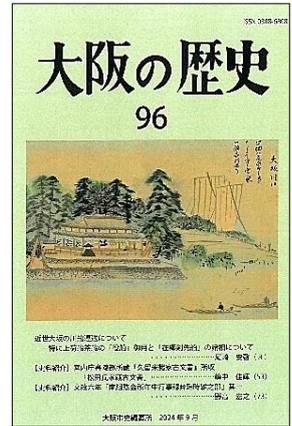
### 第 96 号

【論文】

- ◆尾崎安啓「近世大坂の川船運送について  
—特に上荷船茶船の「役船」御用と「在郷剣先船」の諸相について—

【史料紹介】

- ◆嶋中佳輝「宮内庁書陵部所蔵『久留米諸家古文書』所収  
「松田氏家蔵古文書」
- ◆野高宏之「文政六年「南組惣会所年中行事録并臨時雑之部」其一」



令和 6 年 9 月刊行予定

『大阪市史史料』（本体価格 1800 円 送料実費）

### 第 95 輯『御用録（下）』

大坂町奉行所が与力に発給した組触をまとめた『御用録』。最新の本巻で、明和元年から約 20 年間に記録された 814 件の組触を収めた全 3 巻が完結しました。本巻は、安永 8 年（1779）年 7 月から天明 3 年（1783）3 月分を収録しています。令和 6 年 7 月刊行。

## 刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は、大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館 3 階・大阪市史編纂所内 TEL06-6539-3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店—— ジュンク堂書店（大阪本店・難波店）  
紀伊國屋書店（梅田本店 ※『大阪の歴史』最新刊のみ）

■「編纂所だより」は、年 2 回発行しています。

さまざまな歴史の話題や日々の活動などを、みなさんにわかりやすくお届けする、ニュースレターです。大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています。大阪市立中央図書館（3 階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。

■大阪市史編纂所では、ホームページを開設しています。

催し物や刊行物のご紹介をはじめ、今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問にお答えする「みんなの質問」など、市域の歴史に関する情報を発信しています。

「編纂所だより」もカラー版で閲覧・ダウンロードしていただけます。ぜひ、ご覧ください！  
[https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page\\_id=871](https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871) または「大阪市史」で検索してください。

（令和 6 年 9 月発行）